とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都足立区舎人 5-1-3
園名	アスクとねり保育園

１．活動のテーマ

生活と音

<テーマ>

<テーマの設定理由>

２階建て園舎のため、下から聞こえる音、上から聞こえてくる音など室内で聞こえてくる音がいろいろあり、玩具でも綺麗な音色があったり、興味を抱かせる音がある。室外では、園庭栽培で育てた作物にくる鳥の音、近隣の消防署の音、道路から聞こえる音など、生活環境の中で、高い音や低い音など様々な音が聞こえる中で生活し、その中で音のもたらす力を探究する。

２．活動スケジュール

・６月２回・７月３回・８月１回・９月３回・１０月２回・１１月２回・１２月２回
・２月２回→合計１７回
※６月から２月まで行い、月に１回、音楽の講師を招致し、音や楽器の使い方、手話など助言をもらったりした。子どもたちの気づきや疑問を保育者、講師と共に共有し、子どもの反応や言葉によって次の活動を変えていった。

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）
・園内マップ(保育園内のどこで、どんな音がしたのか記録した)
・スプリンクラー/バケツ/スコップ(園庭遊びの時間に使用した)
・とうもろこし(クッキングの際に皮を剝いた)
・卓上木琴/グロッケン(園の内外から聞こえた音を楽器で表そうとした)
・ウッドギロ/ハンドウッドブロック/カスタネット/タンバリン/鈴/トライアングル(それぞれの楽器の音がどのような音に聞こえるのか考えた。声の大小を比べる時に用いた。)
・ミカサスマイルドッジボール/絵本(ジェスチャー表現をしたり、した後に実践確認するために用いた。)

４．探究活動の実践

【3 歳児実施分】

問いを考える：

「園生活の中でどんな音が聞こえてくるのか」という問いをもとに活動した。

見つけた音を楽器を通して表現し「どんな音がきれい」「どんな音がある」と音探しを行った。生活の音と遊びの中の音を繋げながら活動できるよう問いかけた。

探究活動の様子：

・講師・保育者と一緒に園内・保育室内で聞こえる音に耳を傾ける時間を作り「どんな音が聞こえるかな」を探す「音探し」を行った。
日常の活動中でも、保育者が「どんな音が聞こえるかな」と問いかけ、小さな話し声で話しかけることで「シュッシュッって聞こえるね」「シャーって言ってる」と園庭遊び中やクッキング中でも音に関心が寄せられるようになってきた。また、自然と耳を傾ける姿が見られ場面に応じた声の大きさを意識できるようになってきた。「ここは静かな声ね」「赤ちゃんの泣いている声が聞こえたね」「さっきと違う音がしている」などと言葉にし、友だちと共有する姿が見られた。

・講師に楽器の使い方を学びながら、聞こえた音を表現する際には「同じ楽器でも音は変わるかな」「叩き方を変えるとどうかな」と保育者が声掛け、子どもたちが試したり比べたりできるように援助した。

・子どもたちが音に集中して気づきを深められるようグループに分かれて活動を行い「この音いいね」「今の音、木の音に聞こえる」等、似た音を探したり絵本の中から聞こえてきそうな音を表したりと友だちと共有し楽しむ様子が見られた。

・自分たちで作った楽器を使うことで、同じ素材でも十人十色の音が生まれることに気付き、音を鳴らすことや音の違いを発見することを深めていけた。

ふりかえり(保育士の気付き)：

・普段の園生活には、多くの音が存在しているが、意識して耳を傾けることで子どもたちは、様々な音の違いに気付くことができた。また、楽器を使って音を表現する活動を通して同じ楽器でも、叩き片や強さによって音が変化することを楽しみながら発見する姿が見られた。

・グループで活動することで、子ども一人ひとりが感じたことを言葉にしたり、友だちと共有したりする姿が見られ探求に繋がったと感じる。今後も、子どもたちの気付きや興味を大切にし探究活動を広げていきたい。

【4 歳児実施分】

問いを考える：

園内を探索する中で隣のクラスの話し声、足音などに気付く。特に、緊急車両の音が聞こえたとき「聞こえなかったらどうしよう」と不安になる。聞こえない人にはどうやって伝えるんだろう。手話で伝える時にはどんなことが大切なのかな。など、伝え合う嬉しさを感じられるような問いかけをした。

探究活動の様子：

講師・保育者と一緒に園内・保育室で「音探し」を行い、様々な音に気付く活動を行った。園外から聞こえる救急車の音をきっかけに「もし聞こえなかったらどうしよう」をグループで考える時間を設けた。保育者は「聞こえない人は、どこを見たらわかるかな」「どうしたら相手に伝わると思う？」などの問いかけを行い、相手の立場を考えながら伝える方法を考えられるようにした。「口を見ればいいんじゃない」「目を見てもわかるかも」と自分たちなりに伝える方法を考える姿が見られた。講師や保育者から、ジェスチャーや手話などの伝え方がある事を知ると、ジェスチャーや口の動きなどを試しながら、どのようにすれば相手が伝わるのかをグループで考え、実際にボールをついたり、絵本を読んでみたりと伝えてみた。子どもたちは、ジェスチャーで伝えることを繰り返し試してみたが、中々伝わりにくいことを感じ再度、手で表現する方法を伝えると「やってみたい」と声があがった。手話との出会いをきっかけに「ありがとう」「おはよう」などの簡単な挨拶を知り、「声が出なくても伝わった」「おもしろい」と楽しさや驚きがあった。クイズ形式で手話を当てる遊びをしたり、色の手話からチューリップの歌に挑戦したりと意欲的に取り組んでいた。

ふりかえり(保育士の気付き)：

・「どうやったら伝わるか」という問いから、子どもたちは相手の立場に立って考える姿が見られた。また、ジェスチャーや手話を繰り返し取り組む中で自信が生まれ、表情や身振りを意識した表現へと発展していった。
・活動を日常の挨拶や歌と結び付けて取り入れることで、学びが生活の中に自然と根付いていく様子も見られた。
・多様な伝え方を知ることは特別な学習ではなく「伝え合う楽しさ」を感じる経験の中で育まれていくものであると実感した。

【5 歳児実施分】

問いを考える：

園の中、外の音を探すうちに耳の聞こえない人はどうやって話すのだろう。どうやって気持ちを伝えるのだろうと問いが生まれた。ジェスチャーや表情で伝えようとする中で、手話を知り、どんな言葉だろう。伝えられるのだろうかと探求を進めた。

探究活動の様子：

講師・保育者と一緒に園内での音探しをきっかけに子どもたちから「耳が聞こえない人は、どうするんだろう」「車の音が聞こえないと事故しちゃうよ」「嫌な気持ち・嬉しい気持ちはどうやって言うのだろう」という疑問が生まれた。耳を塞いで、音を聞かない状態を体験することで「怖い」「何もわからない」と声が挙がり、音が聞こえない状態について考えるきっかけとなった。保育者の「聞こえないときはどうやって伝えたらいいかな？」「相手はどこを見たらわかるかな」「どうしたらもっと伝わると思う？」等の問いかけにグループごとに考えることにした。「ジェスチャーで伝える」「表情は」など伝わる方法を考え、試しながら相手に伝わる方法を考えた。講師と保育者が手で話す姿を見ると「何か言っているの」「ゆっくりやって」と興味を持ち、知ることになった。

「ありがとうを悲しい顔でするとどうかな？」「楽しい顔はどんな顔？」と手だけでなく表情の大切さも伝えていくうちに「ゆっくりやればわかる」「顔も(表情)も大事だね」など相手に伝えるための工夫も気付いていった。講師からの活動後には、グループで手話クイズを出し合ったり教え合ったりする中で、繰り返し使う姿も見られ、伝え合う楽しさを感じながら活動が広がり、手話での歌を保護者の方に披露することに発展した。

ふりかえり(保育士の気付き)：

「どうしたら伝わるのか」「自分にできることは何か」と相手を思いやる心を育てる活動であったと感じた。

子どもたちは、遊びの中で自然に学びを深めていく力があることを再認識した。多様性への理解は特別な学習ではなく「伝え合う楽しさ」を感じる中で育まれると実感した。

５．活動の様子が分かる写真

３歳児

活動の様子が分かる写真　２枚以上を貼付してください。

（HP などで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。）

4 歳児

活動の様子が分かる写真　2 枚以上を貼付してください。

（HP などで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。）

5 歳児

活動の様子が分かる写真　2 枚以上を貼付してください。

（HP などで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。）

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都足立区舎人 5-1-3
園名	アスクとねり保育園

１．活動のテーマ

動物や生き物を体で表現する

<テーマ>

<テーマの設定理由>

子どもたちは、体を動かすことが好きなため、体操プログラムでも、動物になりきって体を動かすことに興味がある。本年度から朝の会で体操を取り入れ、人間と他の動物の違いなどを自らの体で表現し学んでいくことが、他者(身体的弱者)への労りなどを学べると考える。また、様々な生き物の動きを体現していくことで、自分の体の構造を学ぶ。

２．活動スケジュール

・６月２回・７月３回・８月１回・９月３回・１０月２回・１１月２回・１２月２回
・２月２回→合計１７回
※６月から２月まで行い、月に１回、体操の講師を招致し、体の使い方や器具の使用方法などの助言をもらったりした。子どもの言葉や発見を講師と共有し、次の活動へとつなげた。

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）
・アーチ/マット(床面表現)・ミニトップ(回転表現)
・ハードル/ジャンプジャンプ(跳躍表現)
・フラフープ/鉄棒/円柱マット(くぐる、またぐ動き)
・ハードル/ジャンプジャンプ(跳躍表現)
・大縄/短縄(跳躍表現)　　以上　　動物や生き物の動きを表現する為に用いた。
・昆虫 2・両生類・はちゅう類・恐竜・動物・魚・鳥
（動物や生き物の特徴を調べるため。）

４．探究活動の実践

【3 歳児実施分】

問いを考える：

「どんな動物がいるの」「その動物はどんなふうに動くのだろう」

「サメとクジラはどちらが速く泳ぐの」「手はどこにあるの」等

子どもたちが図鑑で見て真似っこごっこする姿を見守りながら、特徴をつかめられるような問いかけをした。

探究活動の様子：

・好きな動物を表現するなかで、恐竜にスポットがあたる。恐竜好きな児から「もっとこうした方がいいよ」と見せ合い繰り返すなかで、図鑑を見ながら「指は何本あるの。」「手はどこから出ているの。」と注視する点を保育者が問いかけていった。子どもたちの興味に応じてグループを分け、好きな動物を図鑑で調べ、表現するなかで「これどう。」「似ている。」とやり取りを重ね、全身を使いながら指や膝の伸ばし方などの細部も表している。

子どもが家庭で見たニュース映像（クマの話題）をきっかけに特徴に目が向けられるよう話題を提供し「膝はどうなっているのかな。」「どこを見ているんだろう。」と観察のポイントを示し問いかけて「前を見ている。」「膝は伸びている。」「お尻を高く上げている。」等、気付きを伝え表現していた。

ふりかえり(保育士の気付き)：

・図鑑や写真を手掛かりに、動物の特徴を捉え身体で再現する力がある。

・全身表現の中でも手や腕の使い方によって「その動物らしさ」が明確になった。

・子どもは無意識に腕を揺らしたり、広げたりしているが、そこに着目すると表現がより豊かになる。

・手・腕の動きに着目することで、身体の部位への意識・空間認知・巧緻性や身体コントロールの向上につながった。

【4 歳児実施分】

問いを考える：

知っている動物を表現するだけでなく、図鑑や映像を見ながら、友だち同士で気づいたことを表現できるよう問い、表現したことを振り返り、調べ、表現するのサイクルが出来るよう問いかけた。

探究活動の様子：

・「どんな動物になってみようか」の問いにいろいろな動物の名前を挙げる。思ったまま表現してみた後、図鑑や映像を提示し「どうやって歩くのだろう」「羽はどうなっているかな」と観点の視点を示した。

体操の講師から運動用具の使い方を学び、表現するうちに「もっと高く跳びたい」「次はワニをやってみよう」などの声を受け止めながら「どこが似ているかな」「こっちはどうかな」と図鑑を繰り返し確認し、表現と知識が結びつくよう援助した。図鑑だけでなくドラゴンに興味を持ったグループには、保育者がタブレットを使用して調べた映像を提供し「火をはくんだよ」「羽があるから飛べるんじゃない」と意見を出し合うことで、同じテーマを持つ友だちと考えを共有し、動きを見せ合いながら表現を高め合っていた。。

ふりかえり(保育士の気付き)：

・子どもたちは単に体を動かすだけでなく、図鑑で得た情報をもとにイメージを膨らませ、考えながら表現していることが分かった。
・実在の動物だけでなく、想像上の生き物を取り入れることで、より主体的で創造的な動きが引き出されることに気づいた。
・環境(マットの配置や用具の選択)によって動きの幅が広がり、子ども自身が表現を工夫する姿に繋がっていった。
・友だちの動きが刺激となり「見て・真似て・広げる」という学びの循環が自然に生まれていた。

【5 歳児実施分】

問いを考える：

図鑑や映像を活用しながら、動物や生き物の動きや体のつくりを観察し、自分の体で表現することを通して探求を深めていった。

「どうして速いのだろう」「どうやってバランスをとっているのかな」と言った子どもの気付きや疑問に「どのように工夫すればいいか」「より伝わる表現はどっち」等、問いながら探求を重ねた。同じ用具でも使い方によって違う生き物が表現できるか考えて

探究活動の様子：

・図鑑や映像資料を活用し、生き物の体つくりや動きの特徴に目を向けられるよう観点の視点を示した。それを基に表現していくうちに、動物ごとに興味・関心に応じたグループ編成を行った。
・「どんな動物になれるかな」の問いにいろいろな動物の名前をあげ、表現してみた。・「もっと腕を広げた方がいい」「どんな感じだったかな」と自信がもてなそうな姿があった。
・「どこがその動物らしいかな」「どうしてそう思ったの」と問いかけ、比較や考察へとつなげた。
・「もっとしっぽを揺らして進んでいる」と図鑑を見ながら表現を工夫した。
・用具の使い方を講師から学び、グループ活動中に使用する中で「この道具で猿の揺れ方もできるんじゃない。」と一つの用具から違う動物も表現できことに気付き実践していた。

・活動の後半では、2 人 1 組で 1 つの動物を表現するペア活動も取り入れ協働しながら動きを深められるようにした。役割を決め、動きを合わせようと何度もやり直す姿が見られた。
・友だちの動きを見て改善点を伝え合い「こうしたらどう」と相談しながら動きを追求する姿があった。
・同じ動物でも速さ・大きさ・強弱・手や腕の使い方の違いを比較し、活動後には振り返りの時間を設け気づいた事や工夫したことを言語化できるよう援助した。

ふりかえり(保育士の気付き)：
・動きを模倣するだけでなく、理由や構造を考えて再現する力がある。
・手や腕の使い方に着目することで表現がより、具体的になる。
・比較・検討・話し合いを通して、協同性と表現力が高まっている。
・観察→表現→振り返りの循環が主体的な探究活動に繋がっている。

５．活動の様子が分かる写真

３歳児

活動の様子が分かる写真　２枚以上を貼付してください。

（HP などで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。）

4 歳児

活動の様子が分かる写真　2 枚以上を貼付してください。

（HP などで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。）

5 歳児

活動の様子が分かる写真　2 枚以上を貼付してください。

（HP などで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。）